

活用技術

平成21年度

コシアブラの育苗用土		
[要約] <u>コシアブラ</u> を <u>播種</u> すると、発芽まで1年以上掛かる。播種床の用土としては、鹿沼土と軽石などを混合した水はけと通気性の良い <u>用土</u> が適しており、 <u>育苗</u> の用土としても、播種と同様の水はけと通気性の良い用土が適している。		
森林研究所 きのこ・特産課	連絡先	TEL : 0254-72-1173 FAX : 0254-72-0019

[背景・ねらい]

コシアブラは若芽の独特の香りと味に人気のある山菜で、各地で栽培が試みられている。しかし、増殖の難しさや成育の遅さなどから、栽培技術や増殖技術の開発が望まれている。なお、市場に出回る多くは自生のものを直接採取したり、枝を採取して促成栽培したもので、資源の枯渇が憂慮されるところであるため、大量増殖技術として実生による増殖方法と育苗用の用土について検討した。

[成果の内容・特徴]

- 1 採取された種子は、未熟胚の状態のため、播種後1年以上経過しないと発芽しない（写真1、2）。
- 2 播種に用いる用土として、鹿沼土小粒、軽石小粒、日向土小粒、赤玉土小粒を容積比で概ね7対1対1対1の割合で混合して、篩を用いて微塵を取り除いたものとする、発芽1年目の秋には、発芽個体のうち9割程度は残存する（表1）。
- 3 育苗の用土として、鹿沼土中粒、軽石中粒、赤玉土中粒を容積比で7対2対1の割合で混合し、篩を用いて微塵を取り除いたものを用いると、残存率が約96%と高いが、赤玉土単用では5割程度、畑土では7割程度と低い（表2）。

[成果の活用・留意点]

- 1 発芽までの期間、用土の表面が乾く前に灌水する。
- 2 育苗試験において、混合用土では1年伸長量が、畑土や赤玉土より小さかったので、施肥量の1000倍希釈の液体肥料を5、6、7月各1回を、状況に応じて回数を増やす。

[具体的データ]

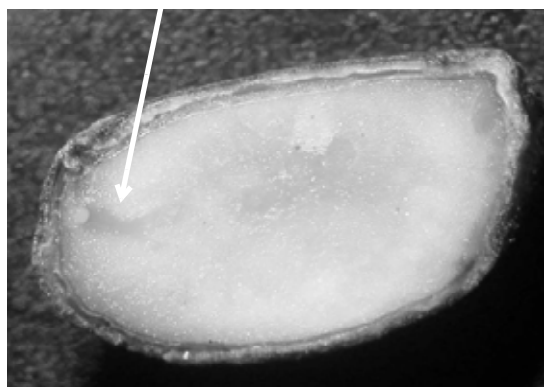


写真1 コシアブラ種子の断面
 (採取2ヶ月後の種子の断面写真。矢印が未熟胚で、大きさは0.1mm以下。)

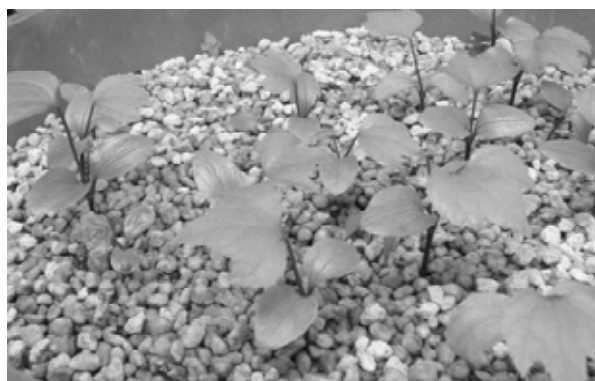


写真2 コシアブラ実生苗
 (2005年秋に採取して2006年1月に播種したもの。発芽は2007年春となった。)

表1 コシアブラの発芽率及び残存率

	発芽率	発芽個体の残存率	発芽1年目平均苗高
混合土	46.7%	89.3%	23.1mm
畑土	測定不能	0%	測定不能

畑土のものは、発芽直後から枯死し、全滅したため測定不能。

表2 コシアブラ2年生苗の用土別残存率と成育

用土	残存率%	平均苗高mm	1年伸長mm
畑土	68.4	59.8	37.0
赤玉土	51.3	59.3	32.7
混合土	96.2	49.1	26.2

(5、6、7月に各1回、1000倍希釈の液体肥料を施用した)

[その他] 研究課題名：コシアブラの栽培技術の確立

予算区分：政策(国補)

研究期間：平成17～19年度

発表論文等：新潟県森林研究所研究報告第50号(2009)